

俳句通信

特別作品25句 今瀬剛一「鏡餅」

特集〈虚子の現在〉〈現在の虚子〉

「花鳥諷詠の政治性

——求む、俳壇に〈一人の強者〉を」 井上泰至

「虚子研究 断想」 本井 英

「歴史の中の『虚子選』」 岸本尚毅

「虚子の俳句具象化論について

——岡田耿陽「汐木」序文を通じて」 中岡毅雄

「『虚子』を超越せよ！

——資料「研究座談会」を読んで」 筑紫磐井

「青苔の虚子」 角谷昌子

「無意識を読む——虚子への試み」

松岡ひでたか

「見届けろ人」 児玉和子

「有情の眼」 黒川悦子

「虚子と現代——私の視点」 岩岡中正

「高浜虚子の触手——虚子作品と脱近代性」

西池冬扇

ネンテンのモーロク俳句50

ころがって、ころがして 坪内稔典

中村和弘30句／「神の山」

【20句競詠】

名取里美「津軽」・山根真矢「先頭」・田中亚美「春蚕」

【エッセイ】

新連載・廣瀬直人の世界

上矢作の風土 井上康明

●作品● 山崎ひさを・岩淵喜代子・寺井谷子・松岡隆子・
加古宗也・小川軽舟・和田順子・高崎公久・
岩城久治・奥名春江・宮谷昌代・柴田佐知子・
徳田千鶴子・矢野景一ほか



十本の指ありげんげ摘んでゐる

三橋 鷹女

ゲンゲと蜜蜂

春、ヘラブナの乗っ込み（浅場で産卵をする事）は大型のヘラブナを釣る最大のチャンスで、釣り人もヘラブナと共に興奮状態になる。

随分昔のことだが、春霞が広がる早朝の岡山、田畑の中を流れる川に掛かる橋の上から水面を見ると、大型のヘラブナが乗っ込んでいる。急いで道具を出し、畦道を通って水際の枯れヨシを掻き分けて釣り座を作り、急いで釣りを始めた。

産卵の水飛沫が顔に掛かるほど激しい乗っ込みであるが、一向に餌を食わない。当然ながら産卵中の魚は餌につかない。いつもの事だが。

一時間ほどでやっと我に帰る。身の回りを蜜蜂が羽音を立てて飛び交っていて、近くに蜜蜂の巣箱があった。振り返ると、通って来たあぜ道の両側はなんと満開のゲンゲ畑だった。

絵文 杉原武弘



鏡餅

今瀬剛一

初富士や赤人大観孫曾孫
来る年の行く年を押す力かな
一人づつ離れてひとり大枯野
思ひ出し笑ひを笑ひ初鏡
去年今年貫く棒を断ち切れり
寄りて離れて毛糸玉赤と白

特集 虚子の現在 〈現在の虚子〉

近年、虚子の新しい〈読み〉が試みられているかに思われます。いま、虚子をどのように読み、どのように理解しようとしているか、などについてお書きいただきました。

新作30句

神の山

中村和弘

ミジンコは水に溶けゆき年詰まる
数へ日の数珠の如くに喇嘛らま僧そう来る
白菜をシルクロードの馬が負う
落石の湿りしままに年迎う
鴨翔つを赤子は首を回し見る
水軍の幟を今に蜜柑島
鳥葬の鷹のみ舞いて初日かな

ネンテンのモーロク俳句50

ころがつて、ころがして

坪内稔典

寒晴れの捻ったみたいあの入り江
寒晴れの貝工房の窓小窓
一夜干しあぶってとくとく寒の酒
水割りの氷の音と君が好き
寒晴れの造船所跡水平線
雪雲を捻ってあたいたい殺したい
山眠る老人たちはすぐこける
よく晴れて冬のバナナと奥さんと



前列右から横井氏、菅野氏、白石氏
後列右から星野氏、相子氏、藤本氏

ゲスト

相子智恵・菅野孝夫

白石渕路・横井理恵

ホスト

星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第49回目です。ゲストは「澤」同人の相子智恵さん、「花鳥来」同人の白石渕路さん、「野火」主宰の菅野孝夫さん、「天為」同人の横井理恵さん、ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 では、始めます。今日は点がばらけましたね。4点句が2つあります。まず、

はんべん取ればはんべん浮き来おでん鍋

◎徳穂◎

孝夫 面白いところを見ていますよね。「はんべん」を取ったら「はんべん」が浮いてきたって。なるほど、「はんべん」なら浮いてきそうな感じがしましたね。もうちょっと、リズムよく出来たかなという感じはしましたけど。

理恵 同じです。取ったらポコッと浮いてきそうな気分の良さが好きでした。「はんべん取れば」は破調ですけど、あとはきちっと納まっているので、逆に字余りが面白い気分を盛り上げてくれるからいいかなと。

渕路 「はんべん」をふたつ重ねたところで、下からポコッと浮き上がってくる感じも出て、面白い場面を詠まれたなと思ってきました。